



なる。三学期に与えた籠の輪を例にあげてみよう。四才児が籠の輪を並べて、とんでも遊んでいるのに興味をもち、いれてもらつたのが、輪を使って遊んだ最初の経験であった。

彼らは、教師を交えてそれをくり返して遊んだ。ある時、それにもあきたのか各自勝手に輪をもって遊びはじめた。輪をもってころがしてみるもの、両手に一つずつもって、それぞれに足をかけて歩こうとするもの、輪を二つあわせ、輪に両足をのせて輪と一しょ

に横這い歩きしようとするもの、フラフープのようにしようとするもの……そして遂に輪の中に入つつながり、電車にまで発展した。子どもが教師よりはるかに創造的であつたことに敬意をはらつたものであつた。

もちろん、体育的な効果は、自由な遊びや運動の中だけでなく、リズム遊びや幼児体操などのように、教師の計画の中で考えられることもある。しかし個人差が大きく興味の持続時間も短かく、団体的な行動をとりにくい幼児にあっては、やはり指導の多くの機会を、自由な遊びの中に求めることになるのではないか。

ひとりひとりが集まって組という集団ができるわけだから、今までの経験からしても、本当に幼児はひとりひとりが違うものである、ということを今更ながら痛感する。

そこで現在の組を考えてみると、これもまた私は変った経験をさせてくれている。

もちろん、その原因と思われるものは幾つかある。その組成が比較的複雑であることや、構成している幼児のそれぞれの性格、などによることが、そうさせている一番主なものであろうと思われる。参考までに組の構成を具体的にあげてみると、

四 才 児

きつかけをとらえた指導例

村 田 修 子

今までに受け持つた何組かのことを考えてみると、それぞれいろいろの傾向があつた。私が幼稚園の先生になりたての頃に受け持つた組については、もっとほかの種類のことにつ

37名

18名	男児	二年保育	9
19名	女児	三年保育	9
11名	三年保育	二年保育	b a (前からひきつづき)
8名	b a (前は運う組)	5名	(前は運う組)

35

三年保育の b のグループの人達の取り扱いが一番問題が多くった。しかもその人達は俗にいうと、おとな的话し、気分が分る敏感な人が多かった。

また全体的にみても、女兒がいわゆるおとなしく、口かずも少ないし、大声を出す人が割に少なかつたし、男児は、元気が無いわけではないが、動きが比較的小さく、遊びのスケールが小さい感じであった。

そのため、中の組の三学期の始め頃まで

は、扱い易いけれども、その反面余りおもしろい感じの組ではなかった。

そういうわけで、私がいつも気にして考えていたことは、何とかして全体の感じをもつと大型にしたい、ということ、遊びの経験の巾を広げたい、ということであった。

動きが小さい、といつても、それは感じの問題で、子どもたちは比較的早い時期からグループを作り、充分にくるくる走りまわり、それ相応に楽しく遊んでいた。遊び方がすらっとしていく、自分を強く主張することが少なく、みんながうまく協調してしまうことが多い。社会性という方面から考えるとたいへん好ましいわけであるが、この年令ではもう少

し多くの人たちが自分中心で、物のとりあい、遊びかたなどについて我を張るのが本当の姿なのではないかしら、と思われるのに、まうことが割に早い時期からできていた。

べきつかけ▽

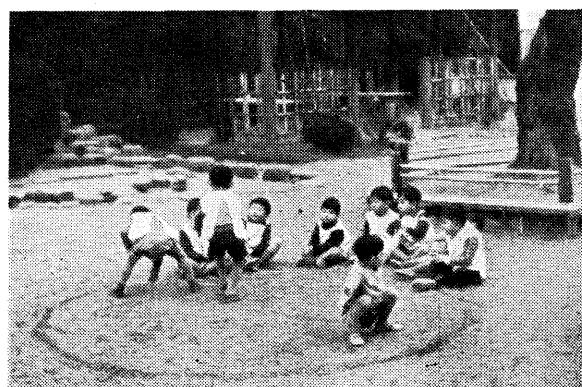
例年のように二学期の終り頃からなわとびがはやりだした。今から考へると、どうもこのへんに組のようすが変り出したわけがありそうである。

同時に男児のほうも同じような傾向になつてきて、今まで単純にただ一団となって走りまわっていた遊びから、ルールを持ったまとまりのある、そしてしかも体力的な遊びがみられるようになってきた。その一つがおすもう遊びである。

おすもう遊び

これもおもしろいことから始まった。長い

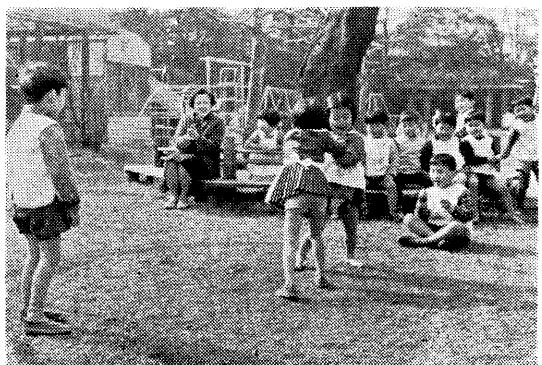
しおまきの準備



『まつた』



押しづもう



が始まりである。

間雨が降らないで、どこもかわき切ってしまつてほこりになやまされていた或る日、私は子どもたちと一しょにフレームの植物に水をやっていた。その水が余ったのでそれぞれかわいた地面に水をまいたり、水でいろいろの形を書いているとき私は大きな円を書いて、「こんな大きなまるができたわ」と持ちかけたところ、すぐそばにいた男の子が「土俵みたいだ。おもうしよう」といい出したの

みんながおすもうというものを知っていたことや、たまたま呼出しのうまい人がいたために、気分がもり上り、本もののおすもうのように、塩まき、四肢をふむこと、待つた、水入り、はては、テレビのスロー・モーションのとりかた、勝った人は賞品を行司からもらうところまであらわれ、友達を見るのも、自分がとるものも、それぞれがたのしみながら

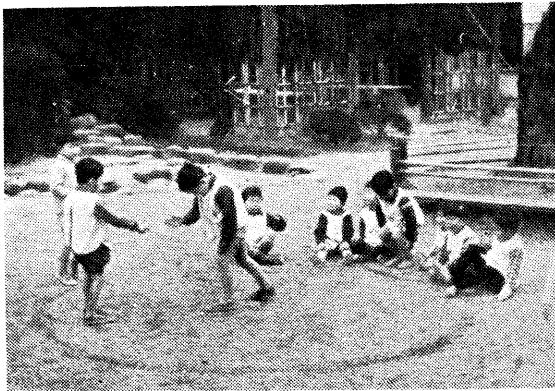
ここまでは余りいつもの年とかわらないことである。
それが或る日、窓の外をみると、女の人们のグループで相談ができる始まらんとしているところである。よくみていると、何とおすもうを始めた。呼出しができて呼ばれた人が出てきて押したり押されたりしてい

る。
私はこのとき驚いたり、うれしかったり、複雑な気持ちであった。

やられた。女人たちも集まつてきてまわりでよく応援をした。

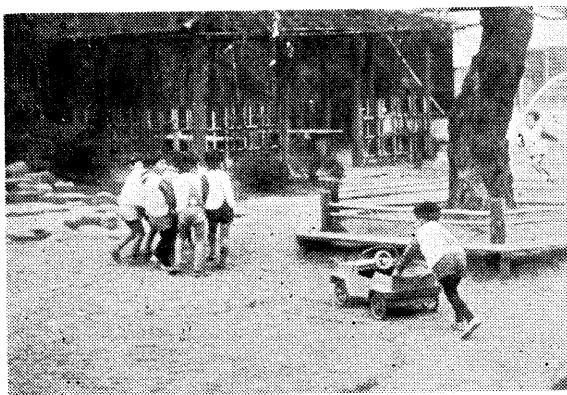
私はおすもう遊びをする前に、必ずみんなに「これは、押してまるの外へ出すおすもうよ。足をかけたりしないおすもうなのよ」と言う。そこで女人達にも「押すおすもうする人ない?」とさそいかけると、そばにいた大半の人がする、と言い出した。入れてもらつてからのようにすをみていると、呼び出す人はたいていは女人同志でやらせる。たまに男人の人とやつても女人人が負けるとはきまつていなかつた。対等に思いきり力を出してやるみんなのようすは本当に楽しそうであった。

うやうやしく賞品をいただく



すべて少し痛くした人をかかえてベンチへはこぶ

救急車も出動



考えてみると、おもうというと、組んで負けてころがされる、という工合の悪いほうばかり考えがちで、特に女の人のすることではないようないこんでしまっている。それが押し出す、押し出される、ということは勝つても負けても簡単なことで、その他のいろいろの要素が含まれていないために気がらくないのであろう。私は、今までのその観念を破

つてくれたことがうれしかったし、また過剰と思われるおとなしさについて心配していたことからもぬけ出しができるだろう、といふ見通しがついたような気がした。

何につけても、うまいきっかけをつかむのがすか、いろいろの面で効果をあげるのにたいへん必要であることを今更のように痛感した。同時にまた幼児自身が直接経験

してみることがたいせつなことも改めて感じた。

もちろん、幼児が試みよう というようになる前に、もう一つ段階がある。それは、何でもやってみよう、と子ども自らが思うようになることである。それには気持ちがほぐれていなければならぬ。やるのが恥ずかしかったり、やつて失敗することを恥ずかしいと思つたり、できる人を見て、自分にはできないと思つてしまふと、何にでも気易くとりついでいかなくなる。こうならないように心持ちをほぐすのは、やはりおとの側の問題である。

気分がほぐれた状態になれば、年令相応のむりのない経験を与えたり、きっかけを作つてやると、子ども本来の創造力を働らかして、思わぬほうに活動が発展していくことはたびたび経験することである。

このおもう遊びによつて、前にあげたことのほかにもつと思わぬ収穫があつた。

その一つは、子ども自身が自分を見出したのではないかと思う。それは、一團となつて走り廻つていたときは、Aちゃんが中心になついて、悪いふんいきではないが、Aちゃん

んにきいてから入れてもらっていたようであ

つたが、おすもう遊びを始めてから、今までのよう A ちゃん中心という気分がかわってきたように思われる。みんなの気持ちの中に淡いながらも自信ができたように見受けられる。これは私にとっても、ほっとした点である。

これからも、おすもう遊びがやられていくことと思うし、私も励ましながらうまくやつていくようを持っていくつもりであるが、次のようなことを考慮に入れておかなければならぬと思っている。

それは、せっかくの人たちだけでも始められたこの遊びを続けてたびたびやり出すようするため、年長組になり組の位置が変わったときに、何とかうまく持ちかけて、中の組だったときやったのと違う場所でやる経験をさせることである。それは、幼児はよく条件反射のようにきまった場所にいくと思いつすが、変ったところではなかなか前のようことが思いつかないことが多いからである。次にもう一つ、やはり今までに経験したことがない事柄なので、なわとびについて簡単にあげることにする。

な わ と び

これは女児の方が主である。前にあげたように、組の空気を変えた一番もどあるように思われる。やり出したとき、一人とびについて次のよう評価基準を作つて調べてみた。

A リズミカルに続けてよくとべる。

B 手のまわし方がややリズミカルでなく、全体的にぎこちないが、続けてとべる。

C 一つまわして縄を地面にとめてはまたぐ

D 全然やらない、やってみてもできない。

評価	時期				
	11月	12月末	1月末	3月	中旬
B	4人	9人	12人	12人	12人
C	5	4	2	4	4
A	3	4	0	2	0

くことを願つたからである。

このことがまたおもしろい結果をみせている。それは隣の組の三才児の人たちにも刺激を与えていることである。もちろん一人ですることはできないが、よくそれらしいことをしているのをみかける。また、先生にとばしてもらうのをたのみにしているらしい。みているとほほえましくなる。先生が両脚跳をしているのに合わせてぴょんぴょんとぶ。それがそろったときに先生が縄をまわす。子

このように急速に多くの人ができるようになることは珍らしい。またやらない人がなくなることも珍らしい。

もちろん技術的などでは、両手が同じようにならなければならない人についてはそのことを分るようになつたし、まわす手と、とぶ足の協調性がどうもまわってくる縄を余り意識せず、こわがらずに先生にあわせて同じ調子でとんでい

とばせてあげる機会を多くもつて、リズミカルなどび方を身につけさせるようにすることなどの指導はしたが、私はそれよりも、次の事がよかつたのだと思う。

できる人をほめるより、できない人に、そ

れで当り前、ということを感じさせるようないい方、励まし方の方に力を入れ、そして、つきり指摘してやつてなお一層の励みになるようにした。

これはつまり気楽な気持ちでとりついてい

くことを願つたからである。

このことがまたおもしろい結果をみせている。それは隣の組の三才児の人たちにも刺激を与えていることである。もちろん一人ですることはできないが、よくそれらしいことをしているのをみかける。また、先生にとばしてもらうのをたのみにしているらしい。みているとほほえましくなる。先生が両脚跳をしているのに合わせてぴょんぴょんとぶ。それがそろったときに先生が縄をまわす。子

小さいながらよく考えたものだと、近頃
になく感心してしまった。或るていどの刺激
を与えることの必要なことも再認識した。

五才児の“健康”

堀合文子

幼児の生活には健康が最大の目的である。

幼児期の幼稚園生活には種々の経験内容が決
められ、教師によつても計画されている。

“健康”ももちろんその一つであるが、言う
までもなく幼児期の経験は互に領域が交叉し、
て分離する事はできない。健康はすべての領
域に働きかけ、幼児の身体的・精神的部面に
考えられなければならないと思うのである。

○教師の計画の中で“健康”的領域ということ

“健康”的指導書が私達の指導の手引をし
てくれる。しかし私共幼児を実際に目の前に
おいて指導しているものは、知識として健康
の内容を分類して知つていなければならぬ
が、幼児の上に表れてくるのは広い広い健康

の分野である。特にこれは幼児期だからであ
ろう。



りをする、鬼ごっこをする、自動車にのる、
砂場であそぶ、などなど。
幼児の健康生活はこれだけでよいといつて
もよい。教師が幼児と共に遊び、指導する事
が幼児期の健康のすべてだと言つても過言で
はないだろう。

幼児が自由感を持ち、自発性のみぢみぢた
生活をする時こそ、幼児の健康は保持され、
健康は伸張していくのだと思う。

健康的領域をやらなくてはと、一列に幼児
を並べてボール投をしたり、幼児用運動具を
使用させたり、乗りたくない幼児を無理に誘
導してぶらんこのり方を指導したりするの
は一見、幼児の健康を指導しているようのみ
えるが、肢体を動かす事においては平均であ
ろうが、幼児期においては眞の健康教育では
ないと思う。

自由感の中でのびのびと幼児の自発活動を
たのしむ生活をしてこそ、幼児の身体的面
も、精神面も健康に発達し、その幼児こそ健
康であるので、私共の指導も、個人とその機
会などを考え、形の中に幼児をはめこまなくと
も指導する機会はたくさんころがっているの
で、その時の指導こそ幼児を健康に成長させ